

学 長 定 例 記 者 会 見 要 項

日 時：平成25年10月15日(火) 11:00～11:30

場 所：事務局第二会議室(小白川キャンパス、事務局4階)

発 表 事 項

1. 学生不祥事防止検討プロジェクトチームの検討結果報告
2. アドバンストセミナーマニュアル「社会人基礎力をみがく」を刊行
3. 「週末寺子屋～子ども大学～」が2013年やまがた公益大賞を受賞しました！
4. 小学生を対象に、イヌワシ触れ合いイベントを開催します
5. 「容器リサイクル工場見学エコツアーin 新庄」を開催します

お 知 ら せ

1. 小白川図書館リユース市の開催
2. 留学生対象和太鼓体験参加者募集中
3. 第4回農学・食料・環境を考える山形県民シンポジウムの開催
4. 山形大学理学部とハワイ大学の国際交流事業報告

(参 考)

- 次回の学長定例記者会見(予定)

日 時：平成25年11月12日(火)11:00～11:30

場 所：事務局第二会議室(小白川キャンパス、事務局4階)

平成25年10月15日

山形大学

学生不祥事防止検討プロジェクトチームの検討結果報告

昨年度、本学学生の不祥事が続発したことを受け、教育・学生支援担当理事のもとに設立された「学生不祥事防止検討プロジェクトチーム*」が、検討結果報告書をまとめました。

◆調査等概要

「学生不祥事防止検討プロジェクトチーム」は、平成25年3月から計13回の会合を開催し、以下のおりヒアリング、調査等を実施し、考えられる原因の分析及び対応策の検討を行いました。

- ・本学で発生した過去の不祥事に関する資料の収集・分析
- ・不祥事を起こした学生の担当教員に対するヒアリング
- ・学生向けサービス事業者に対するヒアリング
- ・学外有識者に対するヒアリング
- ・高校教員に対するヒアリング
- ・全学生アンケート（対象：平成25年度在籍学生8,983名 回答者：3,822名）
- ・各方面の専門家からの多角的助言

◆報告書概要

報告書は、9月30日にプロジェクトチームから担当理事に提出され、以下の内容についてまとめられている。

- ・不祥事案の分析
- ・学生の社会規範に関する諸調査
- ・不祥事の発生原因の考察
- ・今後の対策について

*学生不祥事防止検討プロジェクトチーム

構成は本学教員3名と職員2名の計5名で、平成25年2月27日にプロジェクトがスタートした。

平成25年4月2日の学長定例記者会見において、プロジェクトチームが3月31日までまとめた中間報告を行い、最終報告に向けて調査、検討を行ってきた。

（お問合せ先）

小白川キャンパス事務部学生課

電話：023-628-4121

山形大学学生不祥事防止検討プロジェクト・報告書 <概要>

平成 25 年 9 月 30 日

山形大学学生不祥事防止検討プロジェクトチーム

平成 25 年 2 月 27 日に設置された山形大学学生不祥事防止検討プロジェクトチームの活動について、約 7 か月間の取り組みをまとめた。このプロジェクトは、平成 24 年度に学生の不祥事が多発したことを受けて発足したものである。具体的な個々の事例から不祥事が起きた原因を掘り下げ、なぜこれらの不祥事が発生するに至ったか、その背景と問題点などを解析し、再発防止策を検討した。

不祥事の主要な原因

平成24年度、本学で多発した学生不祥事を検討するために、過去の不祥事案も含めて分析した(第1部)。その結果、およそ9割の不祥事について、学生の「規範意識の未熟さ」が見られた。こうした未熟さは、在学中の学生の社会規範に関するヒアリング及びアンケート調査でも見られた(第2部)。以上の分析結果からは、なぜ平成 24 年度なのか、なぜ山形大学なのかを説明する要素は見つからなかったが、発達心理の理論で「規範意識の未熟さ」を説明できることがわかった(第3部)。さらに、これらの検討内容をもとに、今後の対策を提案した(第4部)。

なぜ、規範意識が未熟なのかについて、地域的要因、時代背景、医学的要因、心理的要因などの様々な側面から検討した。その結果、発達心理学の考え方で説明できることが判明した。今回の検討で得られた仮説モデルを図1に示す。

幼児期から児童期にかけて、様々な年齢、立場、性別の子供や大人との現実場面での交流体験が大切になる。象徴的なものとしては、9歳から10歳ころの子供に見られるギャングエイジ(徒党集団)がある。こうした仲間集団を形成することもなく、多様な対人関係が不足すると、「他者の視点から物事を見て考える」という役割取得能力が成長しないままになる。他者の視点に立つことが不得意であるため、相手の気持ちを配慮することができず、迷惑をかけてしまっても何とも思わないことになる。この結果、道徳性の発達が遅れてしまう。

道徳性の発達が遅れると論理的思考能力も未熟なままになると言われている。すると、原因と結果の因果関係を理解することが難しくなり、不正をすると(原因)どういう結末になるのか(結果)を正しく考えられないようになってしまう。たとえば、「他の人は不正をすると叱られるが自分だけは大丈夫」などと非合理的な考え方をしてしまう。以上のことが規範意識の未熟さをもたらすものだと考えられる。

なお、今回の調査は、一部の限られた情報を基に原因解明を進めたものであり、網羅的、実証的に原因を解明したものではない。このため、今回の取り組みは仮説を構築したものだと言え、今後、ここで提示された仮説の検証をしていく必要がある。以下に今回の取り組みの概要を示す。

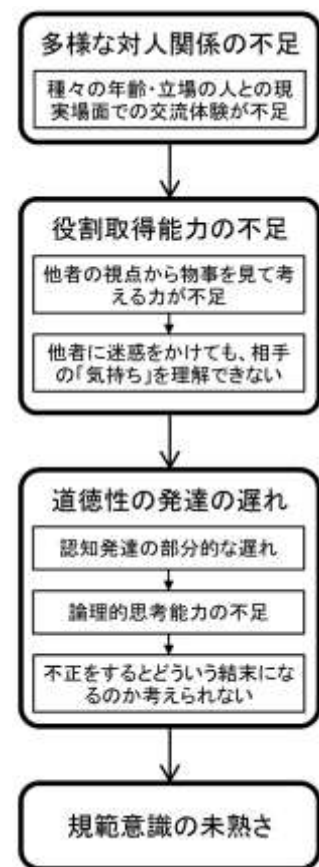


図1. 「規範意識の未熟さ」の仮説モデル

第1部 不祥事案の分析

I. 過去9年間の事案の全体像

平成16年度から平成24年度までの9年間にわたる55件のデータを収集した。このうち、学外にも影響の大きい不祥事として社会的な不正・犯罪39件を取り上げた。社会的な不正・犯罪に関する年度ごとの発生状況を図2に示す。この図から次の事がわかる。平成24年度は12件の事案が発生し、次に多かったのは平成21年度の6件であった。平成24年度を除いた平成16年度から平成23年度までの8年間に着目すると、平均3.4件の割合で事案が発生していた。したがって、平成24年度は直近8年間の3.5倍の件数であった。以上の事から平成24年度の件数が突出して多かったことがうかがえる。

このほか、犯罪種別、学年別分析、入学年度との関係、誕生年度との関係、月別の発生状況、学部別の発生状況、懲戒と非懲戒との関係、通学方法や発生時刻との関係を分析した。

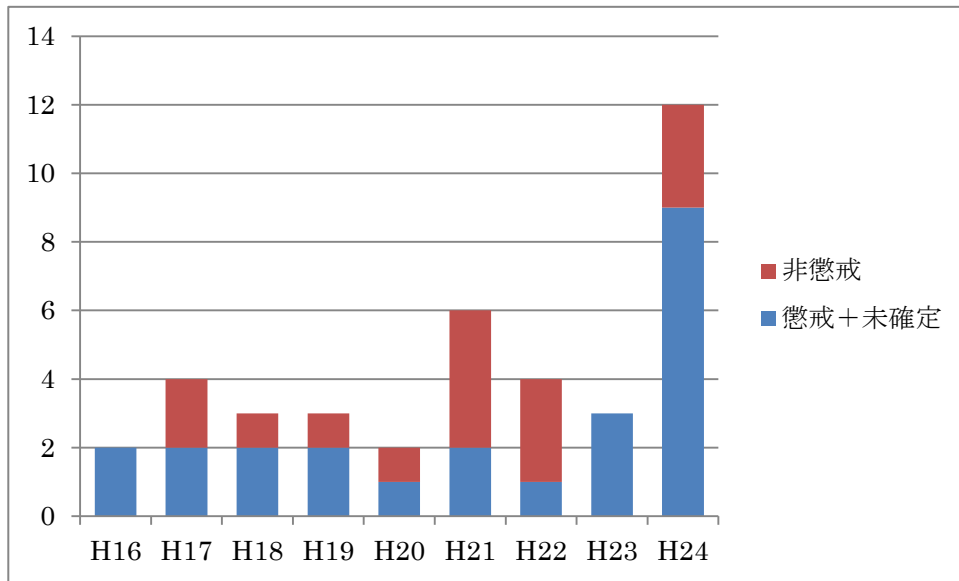


図2. 過去9年間の不祥事発生状況

横軸は事案の発生年度、縦軸は件数を表す。「懲戒」は戒告・停学・退学のいずれかの処分が下されたものである。「非懲戒」は厳重注意などの処分案件である。「未確定」は平成25年9月1日現在、処分が確定していないものである。未確定の事案は平成24年度のみで5件存在するが、懲戒処分になる可能性を勘案し、「懲戒 + 未確定」として合算した。

II. 平成22年度以降に発生した個々の事案の詳細分析

学内記録や学生の反省文などがそろっているのは平成22年度以降の事案であった。そこで、平成22年度から24年度までの3年分について個々の事案の詳細分析を行った。平成22年度以降、何らかの懲戒処分があった事案は27件であったが、このうち8件は試験における不正行為であった。試験における不正行為を除いた19件のうち、感想文や関係者からのヒアリング情報を入手できたのは15件であった。以下、この15件を分析対象とした。ただし、アドバイザーや指導教員、教務厚生担当教員といった関係者に対するヒアリングは、平成24年度の12件の事案についてのみ実施したものである。

15件の主な行為は窃盗、住居侵入、器物破損、未成年者飲酒、名誉棄損などであった。反省文や関係者からのヒアリング結果をプロジェクトメンバーで検討した結果、幾つかの事案で事案を引き起こした学生の規範意識の未熟さ、自分の行為がもたらす結果に対する予見不足、責任感の不足が見られた。これらの状況を概観するために、15事案について詳細に分析し、処分年度ごとに整理した結果を表1に示す。表から次のことが判明した。

1. 社会的な規範意識の未熟さが 13 件で見られた(約 9 割)。
2. 不正を行うとどのようになるのかという結果の予見不足が 9 件で見られた(6 割)。
3. 自分が引き起こしたことに対する責任感不足が 11 件で見られた(約 7 割)。
4. 精神障害の可能性のあるものが 3 件存在した(2 割)。

表1. 個々の事案の詳細分析結果

No.	年度	規範意識	結果の予見	責任感	特徴的な点
1	22	未熟	無かった	不足	—
2	23	極めて未熟	無かった	不足	—
3		やや未熟	無かった	不足	—
4	24	極めて未熟	無かった	不足	日ごろから規範意識の乏しさが顕著。
5		未熟	—	不足	精神障害(依存症)の可能性有り。対人関係上の異常性・未熟さもみられる。
6		極めて未熟(状況依存)	無かった	不足	学内関係者と接する状況では普通だが、別の状況では極めて未熟な面が見られた。社会的・精神的な自立が極めて不足。
7		未熟	無かった	不足	性格的には素直すぎるという印象。
8		やや未熟	—	有る	学生としての甘えが見受けられる。
9		やや未熟	無かった	不足	一般社会の常識や認識が不足。自分が特別な存在だという意識が高い。
10		やや未熟	—	かなり不足	一般社会の常識や認識が不足。自分が特別な存在だという意識が極めて高い。
11		—	—	—	精神障害(窃盗症)の可能性有り。
12		極めて未熟(状況依存)	全く無かった	かなり不足	学内関係者と接する状況では普通だが、別の状況では極めて未熟な面が見られた。根拠が無いにもかかわらず特別意識が高い。
13		—	—	—	精神障害(解離性同一性障害)の可能性有り。
14		極めて未熟	全く無かった	かなり不足	日ごろ規範意識の乏しさが顕著。自己肯定感が低い一方、特別意識が高い。
15		やや未熟	—	有る	

注)

規範意識 面談レポート等の提出期限を守る、教員の質問に嘘をつかないなどといった基本的なルールの順守に関する意識。

結果の予見 不祥事を引き起こした場合、実名報道などで社会的な制裁を受けたり、学内においても停学などの大きな損失を受けるということを予め考える力があるかどうか。

責任感 自分が取った行動に対して責任を取ろうとする意識を持っているかどうか。

「—」印 表中の—は判断材料を入手できなかったことを表している。

第2部 学生の社会規範に関する諸調査

I. 調査目的

平成 24 年度に社会的な不祥事を起こした 12 名は全学生 9077 名の 0.13%に該当し、大多数が不祥事を起こさない学生であった。第2部では、この大多数の学生の特徴や気質などについて調査した。

調査目的は、不祥事を起こした学生との関連を検討することと、今後の対策に役立てるためである。具体的には、次の3種類とした。

- 学生向けサービス事業者に対するヒアリング調査
- 本学学生に対するアンケート調査
- 学内外の有識者に対するヒアリング調査

II. 学生向けサービス事業者に対するヒアリング調査

学生を主たる顧客としているなど、学生と接する機会が多いサービス事業者5名に対してヒアリング調査を行った。主な事業の種類は不動産(アパート)、旅行サービス、レンタルサービスなどであった。ヒアリングの結果、様々な事に積極的にに関わり、自分の可能性を広げていく学生が存在する一方、社会的な場面で支障をきたすような学生が存在し、2極化の傾向がみられることが判明した。特に社会的場面において問題となる学生は次のような特徴を有することが判明した。

1. 集団規範を守らない(守れない)
2. 社会的手続きができない(したことが無い)
3. 非常に素直
4. 未熟で不誠実な対人関係スキル
5. 親の行き過ぎた世話

III. 本学学生に対するアンケート調査

平成25年度の在学学生(学部生及び大学院生)8983名を対象としたアンケート調査を行った。調査票は、学生の出席率が高い授業など、可能な限り回収率が高くなるような場面を部局で選定し、配布と回収を行った。

調査票を回収した結果、3822の回答を得た(回収率42.5%)。回答者の学部・大学院別の内訳を表2に示す。表には平成25年度の学生数も掲載してあるが、回答者の学部生と大学院生の割合は、おおむね学生数と比例していると言える。このようなことから、今回の調査結果は本学学生の全体像を反映しているものとみなした。アンケート調査結果を分析したところ、次のことが判明した。

1. 学習・生活状況

- 授業の出席状況は約9割の学生は比較的良好であり、約半数の学生は規則正しい日常生活を送っている。全体的に勤勉さが見られるが、日常生活については約3割の学生が不規則になりがちであり、注意が必要である。
- 学部生の半数以上が熱心にサークル活動を行っている。大学に来ることが楽しいと思っている学生が半数以上であることも含め、多くの学生が積極的な学生生活を送っていると考えられる。

2. 不祥事に対する学生の認識・反応

- 平成24年度の不祥事はほとんどの学生が知っており、7割近い学生が関心を示していた。
- 全体の8割程度の学生は不祥事が発生したことによる影響を特に感じてはいなかった。
- 何らかの不正を見たり、聞いたりした学生は全体の約半数であった。不正の内容は、「未成年の飲酒」「カンニング」「未成年の喫煙」などが多かった。一部、重大な不正を示唆する記述もあったため、今後、事実関係の検証と対応が必要である。

3. 不祥事防止の取り組み

- 防止策については、不祥事に対する厳罰化と相談体制等の充実にに関する意見が多かった。

4. 本学の相談体制

- 日頃相談している人は友人と家族が多い。大学院生の場合は、教員への相談も多くなる。
- 相談体制は、学生センターや各キャンパス窓口、アドバイザー教員のいずれにおいても、6～7

割の学生が不十分であると回答した。上記で相談体制の充実が望まれていることから、今後、改善に向けて検討する必要がある。

5. 規範意識

- 規範意識の指標として罪悪感を調べた。他大学の学生 116 名（男性 67 名、女性 49 名、平均 19.4 歳）における調査(1)と比較した結果を表3に示す。表3を見ると、男性、女性、全体の全てにおいて本学学生の罪悪感得点の平均値が上回っており、不正に対する罪悪感を強く感じる事がわかる。このことから、全般的に高い規範意識を有していることが示された。

6. 社会性

- 社会性の指標の一つである自己主張と自己抑制を調べた。その結果、52.8%の学生が自己主張も自己抑制もできていると回答した。したがって、本学学生の半数は社会性が発達していると言える。
- 一方、10.6%の学生が自己主張及び自己抑制のどちらもできていないと回答した。これらの学生に対しては社会性を向上させるための取り組みが必要になる。

表2. 回答者の内訳

	学部学生	大学院生	学年不明
回答者	3414 名 (89.3%)	310 名 (8.1%)	98 名 (2.6%)
学生数	7695 名 (85.7%)	1288 名 (14.3%)	—

表3. 罪悪感の平均値

	人数	男性	女性	全体
山形大学	3515	25.5	26.7	26.0
他大学	116	20.0	22.2	21.0

IV. 有識者に対するヒアリング調査

有識者に対するヒアリングは、学内外の有識者に対して実施した。学外の有識者は、教育学や臨床心理学を専門とする私立大学教員 3 名、進学指導に従事している高校教員 1 名、教育産業で調査活動などを行っている実務家 1 名とした。主なヒアリング結果は次のようになった。

1. 学生不祥事の原因として、どのような事が考えられるか

- 対人場面における葛藤経験が不足している。
- 自己抑制能力の不足により道徳的に間違っただけをしてしまう。
- 「素直」だから良くない事もそのまま受け入れてしまう。
- 高校までの教育において社会規範よりも学力偏重の時期があった。

2. 他大学の不祥事に関する状況はどうか

- 分散キャンパスだから不祥事が発生するという事は無い。

3. 最近の学生の特徴・気質はどのようなものか

- 「規範意識の未熟さ」と「素直さ」は他大学の学生でも見られる。
- ギャングエイジを経験せず、役割分担の経験をしていない。これと関連して役割取得能力(他者の視点から物事を見て考える力)が不足している。
- 共同体意識は薄く、何か問題があったときに、全員で議論して、全員で謝るなどの連帯感は薄いと感じる。
- 失敗に対する恐れが大きい。失敗から学ぶという事を知らない。
- 大学生活が他人事になっている。「めんどくさい」という表現が象徴的。
- リセットするとやり直せるような空想の世界に生きているようだ。

(1) 石川・内山(2002)「青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連」 発達心理学研究, 13, 12-19.

第3部 不祥事の発生原因の考察

第3部では、「第1部 不祥事案の分析」で取り上げた社会的不正・犯罪の原因を考察した。いくつかの観点から検討したところ、地域的要因、時代背景的要因、医学的要因では説明できないが、心理的要因で説明できることが判明した。心理的要因に関する主な内容は、冒頭の「不祥事の主要な原因」で記述した通りであり、図1で示されるような仮説モデルで説明される。

さらに、「第2部 学生の社会規範に関する諸調査」の結果、社会性全般についても未熟さがみられた。ここでいう社会性とは「個人が自己を確立しつつ、人間社会の中で適応的に生きていく上で必要な諸特性」のことである。この社会性の未熟さに関しても図1の「多様な対人関係の不足」が関係している。多様な対人関係が不足すると、人と意見が対立するような葛藤体験をしなくなる。また、目の前に存在する人との対人コミュニケーション能力も不足する。これらが社会性の未熟さを引き起こすと考えられる。これらの関係を図3に示す。

葛藤体験が不足すると、葛藤を克服する力が育たない。その結果、葛藤に直面した時、対人的なコミュニケーションを遮断するといった回避・逃避を覚えるようになる可能性が高い。また、対人コミュニケーション能力不足の結果、相手の話を聞けない、自分の考えを主張できないという状況になる。このため、会話が極端に苦手になり、極度の人見知りになる可能性が高い。これらの葛藤体験の不足やコミュニケーション能力の不足は、規範意識の未熟さとも密接に関係しており、自己の確立を困難にし、社会適応ができない状況を生み出す。この結果、社会性の未熟さをもたらすと考えられる。

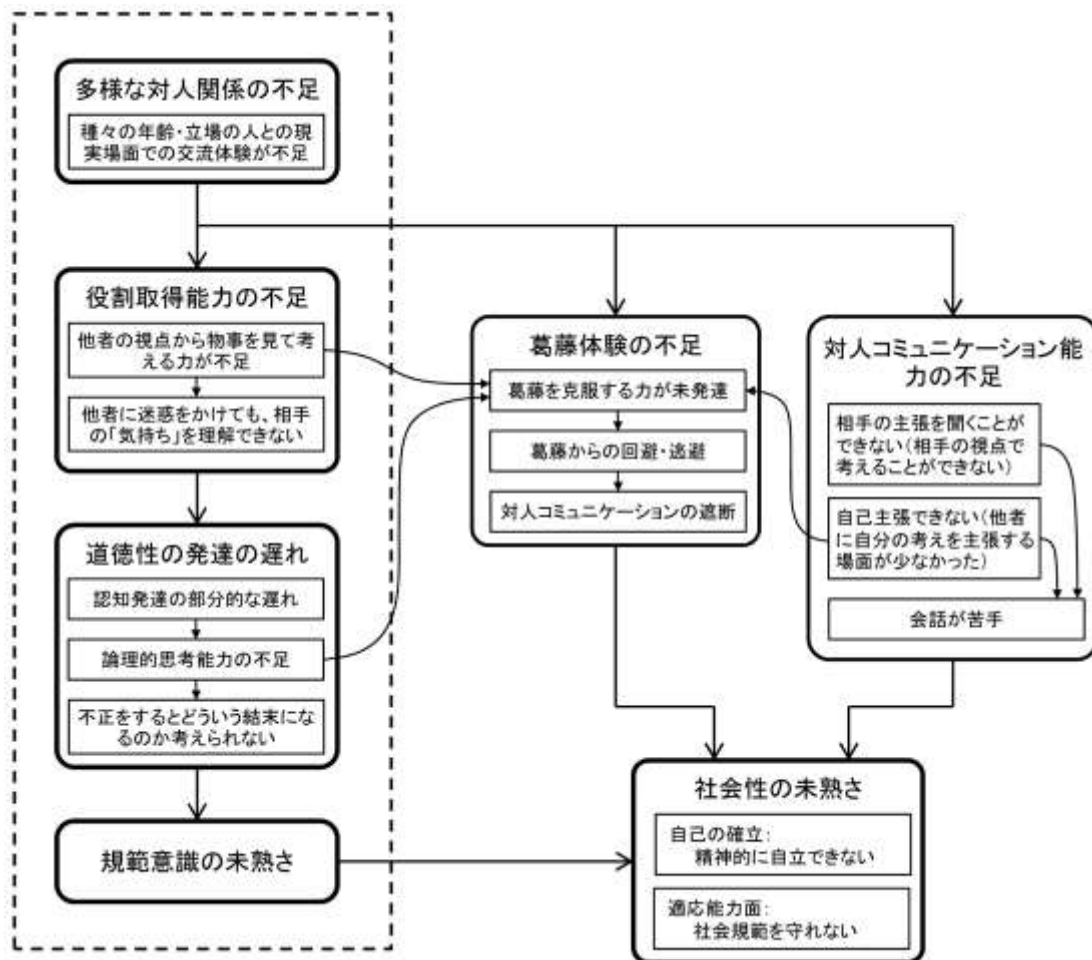


図3. 「規範意識の未熟さ」と「社会性の未熟さ」の仮説モデル

第4部 今後の対策

不祥事を起こした学生について分析した所、多くの学生に「規範意識の未熟さ」が見られた。在学中の学生については、多くの学生に勤勉が見られ、積極的に楽しい学生生活を送っていることが確認された。一方、一部の学生に規範意識だけでなく社会性の未熟さも見られた。したがって、不祥事発生のリスクを低減させるためには、現在問題のない学生が現状を維持し、問題の発生日数を低下させるという予防的な取り組みが中心になるであろう。具体的には次のような取り組みが考えられる。

1. 社会性向上を目指す授業の実施
2. 学生生活における社会規範の啓発・教育・介入
3. 授業や研究指導における社会規範の浸透
4. 相談体制の充実化

これらの取り組みが図3のどこの部分に該当するのかを図4に示した。今後、こうした様々な取り組みを実施、拡張していくことが再発防止につながると考えられる。

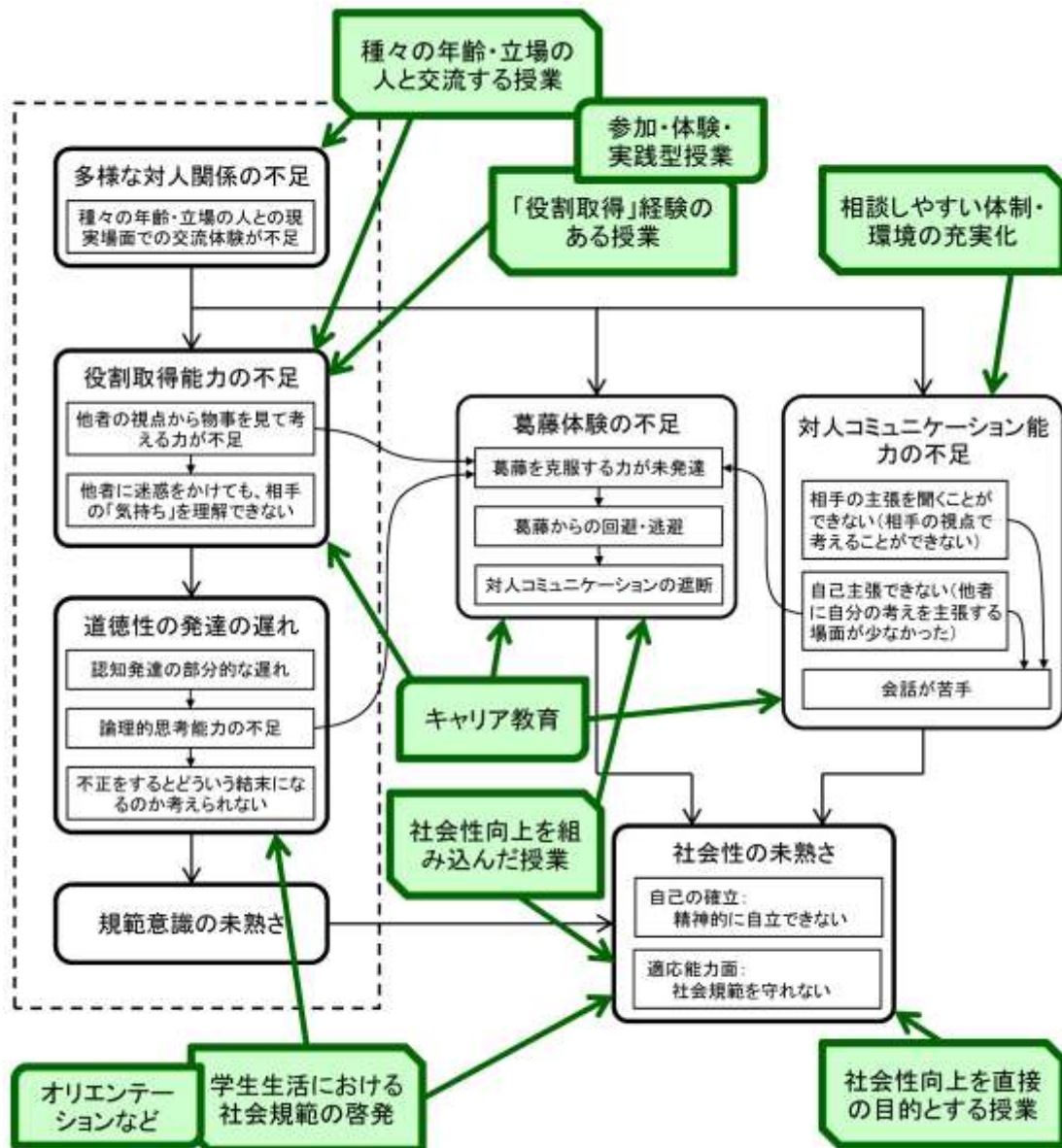


図4. 予防的な取り組みの強化

平成25年10月15日
山形大学

アドバンストセミナーマニュアル「社会人基礎力をみがく」を刊行

山形大学で、基盤教育の企画・検証を担っている基盤教育院研究部が、今年度からスタートさせた導入科目「アドバンストセミナー」（主として1年後期、選択科目）の教材として、『社会人基礎力をみがく』を編集し、山形大学出版会から刊行しました。定価は800円（消費税別）。

◆経緯

平成22年2月に作成し、ご好評をいただいている『スタートアップセミナー 学習マニュアル なせば成る！』の姉妹編という位置づけで、大学での学びに加え、将来社会で生きていくために必要な基本的能力を身につけることを目標として編集しました。

昨年秋には、試作品を作成し、基盤教育の授業で活用すると同時に、学外の大学・高校などの教員や企業・団体職員およそ40名の方々にモニターを依頼し、ご意見を頂戴しました。大学が送り出したい人材のイメージと社会が求める学生像との調和を意識し、内容を精選して編集したものです。

その結果、大学だけではなく、高校でのキャリア教育や企業での職員研修にも活用していただける内容となっています。

◆主な内容

- ・プレゼンテーション能力／コミュニケーション能力のステップアップ
- ・新聞活用術
- ・コミュニケーションツールとしての電子メールの作法
- ・グループワーク、イベントメイキングのステップアップ
- ・課題発見・解決のステップアップ
- ・自分について考える～「自分を知る」方法について～
- ・スケジュール管理／敬語は難しくない／社会を知る技法
- ・フィールドワーク／実験／レポート作成のためのインターネットリテラシー
- ・文献調査のための情報検索術／理工系学生のためのレポート様式

（問い合わせ先）

山形大学基盤教育院 教授 山本 陽史

電話：023-628-4659

電子メール：yamaharu@yz.yamagata-u.ac.jp

社会人

アドバンストセミナー マニュアル

基礎力をみがく

山形大学基盤教育院研究部 編著
山形大学出版会

目次

はじめに	
序章 「社会人基礎力」を問う	4
第1章 論理的コミュニケーション能力をみがく	
1-1 プレゼンテーション能力のステップアップ	10
1-2 コミュニケーション能力のステップアップ	14
1-3 新聞活用術 一就活適齢期からでは間に合わない	18
1-4 新聞に学ぶ読ませる文章作成法	20
1-5 コミュニケーションツールとしての電子メールの作法	22
第2章 課題発見・解決能力をみがく	
2-1 グループワーク、イベントメイキングのステップアップ	26
2-2 課題発見・解決のステップアップ	30
2-3 イベントを運営する	34
第3章 自己形成、自己管理能力をみがく	
3-1 ライフデザインの考え方	40
3-2 キャリアについて考える ～キャリアをデザインする～	44
3-3 自分について考える ～「自分を知る」方法について～	46
3-4 スケジュール管理	48
3-5 敬語は難しくない 一「うち」と「そと」の区別	52

第4章 情報収集・分析能力をみがく

4-1 社会を知る技法	56
4-2 フィールドワーク	60
4-3 実験	64
4-4 レポート作成のためのインターネットリテラシー	68
4-5 文献調査のための情報検索術	70
4-6 よいグラフの作り方	74

第5章 理工系学生のためのレポート作成術

5-1 理工系学生のためのレポート様式	78
5-2 理工系学生のためのレポート様式 実験レポート編	80

平成25年10月15日
山形大学

「週末寺子屋～子ども大学～」が2013年やまがた公益大賞を受賞しました！

東日本大震災から2年がたちましたが、今年の3月現在、福島からの避難者は1万人を超えていました。そこで、避難者の子供たちの修学支援ができないかと考え、「週末寺小屋ー子供大学」を企画しました。

NPO法人子供フェイスブック仙道 富士郎代表、駒沢大学藤井 淳准教授、山形大学松尾 剛次教授が中心となり、真宗大谷派教務所の協力を得て、本学の人文学部学生（早乙女敏）、工学部学生（井村翔）、医学部学生（田村友佳、阿部拓哉）らに呼びかけ、講師になってもらい、修学支援をいたしました。

4月から7月末は山形社会貢献基金（申請代表者松尾）の支援を受けて、毎週土・日に山形（会場、大谷派山形教務所）と米沢（置賜総合文化センター）で「寺小屋」を開催しました。常時、5・6人（多いときは17・18人）の避難者の子供たちの参加がありました。この度、この活動が認められ、公益大賞を受賞するにいたりました。

*やまがた公益大賞：公益活動に対する県民の関心を高め、その積極的な参画を促すとともに、NPOをはじめとした県民の公益活動を活性化することを目的に、地域課題の解決に取り組む様々な公益活動を顕彰し、県民に広く紹介するというもの。

<p>（お問合せ先） 人文学部人間文化学科・教授 松尾剛次 電話：023-628-4917 Mail: kmatsuo@human.kj.yamagata-u.ac.jp</p>

平成25年10月15日

山形大学

高等教育機関連携情報発信事業

小学生を対象に、イヌワシ触れ合いイベントを開催します。

大学コンソーシアムやまがたでは、「高等教育機関連携情報発信事業*」において、「イヌワシ触れ合い体験 in山形」と題して小学生対象に学習イベントを行います。第1部は山形大学農学部教授の林田光祐氏による「講演」、第2部は本物のイヌワシを目の前でご覧いただく「触れ合い体験」を予定しています。

1. 目的

里山と生き物の大切さについて学び、実際に里山に住む国指定天然記念物であるイヌワシと接することを通して、小学生が里山と生き物の大切さを身近なものとして考えること。

2. 内容

- 第1部 山形大学農学部教授 林田 光祐 氏による講演
演題「人と共生する里山の生き物たち」
里山に暮らす生き物の大切さについて、お話しします。
- 第2部 イヌワシと触れ合おう
講師 高橋 誠 氏（イヌワシの森倶楽部 代表）
松原 英俊 氏（日本唯一の現役・鷹匠）
実際に、イヌワシの姿を間近でご覧いただきます。

3. 開催場所

- 第1部 ゆうキャンパス・ステーション（山形むらきさわビル1階）
第2部 山形駅西地区再開発事業用地芝生ゾーン
※雨天時は、会場をゆうキャンパス・ステーションに変更。

4. 日時

- 平成25年11月9日（土）第1部 午後1：30～午後2：30
第2部 午後3：00～午後4：30

*高等教育機関連携情報発信事業：

県内の高等教育機関が連携し、教育・研究内容を情報発信することにより、高等教育機関の地域貢献及び県民への学習機会提供の拡大を図るとともに、県内からの県内高等教育機関への進学者の確保に資することを目的に、山形県より委託された事業

（お問合せ先）
大学コンソーシアムやまがた事務局
今野、大瀧
電話 023-628-4842

平成25年度 小学生対象体験型学習イベント

イヌワシふれあい体験！ in 山形



- 期日：平成25年11月9日(土)
- 対象：小学生
- 定員：50名 ●参加無料
- お申込み：電話またはチラシ裏面の参加申込書に必要な事項をご記入の上、FAX、郵送、メール等でお申込みください。
- 申込締切日：平成25年11月8日(金)
※定員になり次第締め切らせていただきます。
※当日、保護者の方の同伴は自由です。

【第1部】

13:30～14:30

『人と共生する里山の生き物たち』

講師 林田 光祐 氏 (山形大学農学部 教授)
内容 里山に暮らす生き物の大切さについてお話しします。
会場 ゆうキャンパス・ステーション (山形むらきさわビル1階)
アクセス 山形駅東口より徒歩1分



【第2部】

15:00～16:30

『イヌワシと触れ合おう』

講師 高橋 誠 氏 (イヌワシの森倶楽部 代表)
松原 英俊 氏 (日本唯一の現役・鷹匠)
内容 実際にイヌワシが飛ぶ姿を間近でご覧いただきます。
会場 山形駅西地区再開発事業用地芝生ゾーン
※雨天時は会場がゆうキャンパス・ステーションになります。
アクセス 山形駅西口より徒歩2分
※第1部から引き続き参加される方は、係員が上記会場までご案内いたします。



主催

後援

お申込み・お問合せ

大学コンソーシアムやまがた
山形市教育委員会・山形大学

〒990-0039 山形市香澄町1-3-15 山形むらきさわビル1階
TEL: 023-628-4842 FAX: 023-628-4820
E-mail: unicon@jm.kj.yamagata-u.ac.jp



大学コンソーシアムやまがた



FAX:023-628-4820

大学コンソーシアムやまがた事務局 行き

「イヌワシふれあい体験！ in 山形」に参加申込みをします。

必要事項を明記の上、FAX・郵送またはE-mailにてお申込ください。

申込締切日：平成25年11月8日（金）までにお申込をお願いいたします。

(ふりがな)		
氏名		
(ふりがな)		
保護者氏名		
住所		
連絡先	TEL	
	E-mail	
学校名		
参加プログラム	いずれかを○で囲んでください。 保護者の方も参加される場合は右チェック欄に☑をお願いいたします。 【第1部】 参加します ・ 参加しません 【第2部】 参加します ・ 参加しません	保護者チェック欄 第1部 <input type="checkbox"/> 第2部 <input type="checkbox"/>

受講申込者が多数の場合は、お手数ですが参加申込書をコピーしてご利用ください。

この申込書にご記入いただいた情報は、今回の講座を受講するために必要な事務連絡等に使用すると共に、参加者名簿の作成にのみ使用させていただきます。

【お申込み・お問合せ先】

大学コンソーシアムやまがた ゆうキャンパス・ステーション

〒990-0039 山形市香澄町1-3-15 山形むらさきさわビル1階

TEL:023-628-4842 FAX:023-628-4820 E-mail:unicon@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

平成25年10月15日
山形大学

プロスポーツ大学間連携人材育成等推進事業

「容器リサイクル工場見学エコツアーin新庄」を開催します

大学コンソーシアムやまがたでは、今年度山形県から委託を受けた「プロスポーツ大学間連携人材育成等推進事業※」の一環として、11月9日（土）に「容器リサイクル工場見学エコツアーin新庄」を開催します。

1. 目的

モンテディオ山形のホームゲーム時に試合会場において使われているリサイクル容器が、環境保護や障がい者雇用に貢献していることを学生やサポーターの皆様に理解していただく。

2. ツアー内容

◎ゆうキャンパス・ステーション前発着

株式会社ヨコタ東北（工場見学）

たんぽぽ作業所（選別作業見学）

友愛園（資源化工程見学）

最上広域交流センターゆめりあ（ショッピング）

3. 日時

平成25年11月9日（土）9:00—17:30【小雨決行】

※プロスポーツ大学間連携人材育成等推進事業：

県内大学間の連携により、様々な地域課題に対して果敢に取り組む人材の育成を図ると共に、本県の地域資源であるプロスポーツと若者（大学生）の行動力や柔軟な発想を活かし、地域おこし活動などを展開することで活力に満ちた地域社会の実現を目指すために、山形県より委託された事業

[詳しくは、別添資料をご覧ください。]

（お問合せ先）

大学コンソーシアムやまがた事務局

奈良崎・松田

電話 023-628-4842

エコについて考えてみませんか？

容器リサイクル工場見学

エコツアー in 新庄

♻️ 平成25年11月9日(土) ♻️

◎モンテディオ山形のホームゲーム時に会場で使用されているリサイクル容器が、環境保護や障がい者雇用に貢献していることを皆様に理解していただくことを目的としたエコツアーです！

発着場所 ↔ ゆうキャンパス・ステーション前

! 9:00 出発

10:30-12:00 ① 株式会社ヨコタ東北

12:30-13:30 昼食

13:45-14:15 ② たんぽぽ作業所

14:30-15:00 ③ 友愛園

15:20-16:00 最上広域交流センターゆめりあ

! 17:30 到着



参加者募集



NDノフスタジアム山形 エコステーション



山形大学 下平裕之教授が同行いたします！

参加者募集

◎対 象 / モンテサポーター、学生

◎定 員 / 30人

◎申込期限 / 10月31日(木) ※定員になり次第〆切ります。



参加費 1000円!!!

※ツアーの詳細は裏面をご覧ください。

主催 / 大学コンソーシアムやまがた

『容器リサイクル工場見学エコツアー in 新庄』

参加者募集！

1. 目的

モンテディオ山形のホームゲーム時に試合会場において使われているリサイクル容器が、環境保護や障害者雇用に貢献していることを学生やサポーターの皆様に理解していただくことを目的とします。

2. 日時及びスケジュール

平成25年11月9日（土）

◎発着場所／山形駅東口 ゆうキャンパス・ステーション前

乗車場所：ゆうキャンパス・ステーション前 発車時刻 9：00

↓（移動※1時間30分程）

10：30～12：00 ① ヨコタ東北到着・工場見学（1時間30分）

↓（移動※30分程）

12：30～13：30 ② 昼食（1時間）

↓（移動※15分程）

13：45～14：15 ③ たんぽぽ作業所（選別）見学（30分）

↓（移動※15分程）

14：30～15：00 ④ 友愛園（資源化）見学（30分）

↓（移動※20分程）

15：20～16：00 ⑤ 最上広域交流センターゆめりあ ショッピング（40分）

↓（移動※1時間30分程）

降車場所：ゆうキャンパス・ステーション前 到着時間 17：30

3. 参加費（昼食代金）

1000円（※参加費は当日ご乗車いただく際にお支払い願います。）

4. 主催（協力）

大学コンソーシアムやまがた

株式会社ヨコタ東北、NPO法人たんぽぽ作業所、障害福祉サービス事業所友愛園

5. 参加申込み

募集定員／30人

締め切り／平成25年10月31日（木）です。（※定員になり次第、〆切ります。）

① お名前、②ご住所、③ご連絡先 を事務局までお知らせください。（本紙FAX可）

お名前	ご住所	ご連絡先（TEL）	ご連絡先2（メールアドレス）
	〒		
	〒		
	〒		
	〒		

大学コンソーシアムやまがた事務局（ゆうキャンパス・ステーション）

〒990-0039 山形県山形市香澄町1-3-15 山形むらきさわビル1F

TEL:023-628-4842 FAX:023-628-4820 メールアドレス:unicon@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

平成25年10月15日
山形大学

1. 小白川図書館リユース市の開催

山形大学小白川図書館で2部以上所蔵する現在利用のない図書を、ご希望の方に活用していただくために、昨年につき、リユース市を開催します。今年は、約1,000冊の各分野の学術書等を準備し、1冊100円で販売します。

◆日時：10月19日(土) *八峰祭(大学祭)の開催日
12:30~16:00

◆場所：山形大学小白川図書館1階シアタールーム

【詳細は別添の資料をご覧ください。】

2. 留学生対象和太鼓体験参加者募集中

昨年度本学が採択された、文部科学省留学生交流拠点整備事業の一環として、工学部国際交流センター主催の「和太鼓体験」を企画しました。本学の留学生だけでなく、県内の大学に在籍する留学生を対象として、白鷹太鼓鷹翔会の演奏を聴き、実際に和太鼓をたたいてみるという内容です。

◆日時：10月27日(日) 13:00~15:00

◆場所：工学部百周年記念会館1Fセミナー室

◆対象者：県内の留学生であればどなたでも。学年不問

◆参加費：無料

◆申込締切：10月24日(木) 17:00

【詳細は別添の資料をご覧ください。】

3. 第4回農学・食料・環境を考える山形県民シンポジウムの開催

山形大学農学部、農業大学校、農業高校の学生・生徒及び教職員が一堂に会し、最新の農学研究や農業学習に関する成果を紹介し、県民の皆様に農学や農業学習の面白さを理解していただき、これからの農業を担う若者が未来を語り合い、農業の魅力を発信するとともに、山形県農業の発展に資することを目的に開催します。

◆日時：平成25年11月12日(火) 午後1時から4時まで

◆場所：山形県立村山農業高等学校 「耕道会館」ホール

〒995-0011 村山市楯岡北町一丁目3番1号

◆内 容：

- ・ シンポジウム(13:20～14:20)
学生・生徒による「山形の農と食と環境を担う私たちの挑戦」
- ・ パネルディスカッション (14:30～15:50)
テーマ 「魅力ある農業・ユニークな農業～私たちの挑戦～」

※入場無料、事前申込不要ですので、どなたでもご参加ください。

【 詳細は別添の資料をご覧ください。】

4. 山形大学理学部とハワイ大学の国際交流

事業報告

- 10月初旬、理学部が学術交流協定を締結しているハワイ大学マノア校海洋・地球科学
- ・ テクノロジー学部から、グレッグ・ムーア教授を招聘して教育研究交流を行いました。

◆主な交流事業内容

- ・ 地球環境学科の地球物理学関連のゼミへの参加
- ・ 招待講演会の開催
- ・ 東日本大震災被災地の状況視察
- ・ 東北大学地震噴火予知センター訪問、観測体制などについての情報交換

◆今後の交流事業の予定

- ・ 11月上旬に、本学科の大学院生をハワイ大学に派遣し、共同研究を進める
- ・ 来年4月に3年生・大学院生・教員がハワイ大学を訪問し講義の受講、情報交換を行う

【 詳細は別添の資料をご覧ください。】

不用となった大学図書館の本を販売いたします。今年は約1,000冊！

山形大学小白川図書館



リユース市

日時 平成25年10月19日(土)

12:30~16:00

場所 山形大学小白川図書館 1階シアタールーム

内容 各分野の学術書等 約1,000冊

価格 1冊 100円

不用雑誌の無償配布コーナーもあります。



- ・お持ち帰り用の紙袋・バッグ等をご持参ください。
- ・今回販売する図書は、小白川図書館において重複（2部以上）所蔵する現在利用のない図書であり、館内書架スペースの効率的運用を図るために利用者の方へ譲渡するものです。

問合せ先 : 山形大学小白川図書館 総務担当 TEL.023-628-4904

留学生対象

和太鼓体験 参加者募集中



留学生のみなさん！
今年の日本文化体験は、「和太鼓」体験です。
演奏をきいたり、実際にたたいてみたり！
一緒に楽しみましょう☆ぜひ参加してください♪



い つ：10月27日（日）
13：00～15：00

場 所：山形大学工学部
百周年記念会館1Fセミナ一室

演 奏：しらたかだいこ ようしょうかい
白鷹太鼓 鷹翔会

学生支援担当の黒沢が
所属しているグループ
です☆

対象者：県内の留学生であればどなたでも。学年不問。

参加費：無料

定員：なし

申込方法：氏名、大学名(学部・学科名)、学年、学籍番号、国籍、
電話番号、メールアドレスを記載の上、
メール(QRコードをご利用ください)、
または学生支援窓口で直接お申込みください。

交通費：各自負担

申込締切：10月24日（木）17：00



主催：山形大学工学部国際交流センター

【本件についての問合せ・申込先】
山形大学工学部・国際交流センター
工学部学務課学生支援担当内：黒沢
TEL：0238(26)3017
Email: kougakusei@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

第4回 農業・食料・環境を考える山形県民シンポジウム

～私たちの挑戦～

日時： 平成25年11月12日（火）

13:00～16:00

場所： 山形県立村山農業高等学校・耕道会館ホール

◆開会 13:00

開会の挨拶 山形大学農学部長 西澤 隆

挨拶 山形県知事 山形大学長 山形県教育長

◆シンポジウム 13:20～14:20

学生・生徒による「山形の農と食と環境を担う～私たちの挑戦」

農業高等学校・農業大学校・山形大学農学部

◆パネルディスカッション 14:30～15:50

テーマ「魅力ある農業・ユニークな農業～私たちの挑戦～」

司会（コーディネーター） 山形大学農学部教授 平 智 氏

アドバイザー 山形大学農学部教授 小沢 亙 氏

パネリスト 山形県内の農業実践者

主 催： 山形大学農学部 山形県立農業大学校

山形県立上山明新館高等学校 山形県立寒河江高等学校

山形県立村山農業高等学校 山形県立新庄神室産業高等学校

山形県立置賜農業高等学校 山形県立庄内農業高等学校

後 援： 山形県教育委員会

入場
無料

ハワイ大学国際交流事業：グレッグ・ムーア教授招聘報告

理部地球環境学科

伴 雅雄

国際事業化研究センター「海外からの講演者招聘助成事業」の補助を受け理学部の国際交流事業の一環として、2013年9月30日～10月4日にハワイ大学マノア校 海洋・地球科学・テクノロジー学部のグレッグ・ムーア教授を招聘しました。グレッグ・ムーア教授は世界をリードする地震学者の一人で、特に反射波を用いた沈み込み帯・海溝付近の海洋地殻の構造解明の研究で有名です。2000年以降は海洋研究開発機構との共同研究で、大型掘削船「ちきゅう」を用いた南海トラフの調査を行い、過去に巨大地震をもたらしたと考えられる断層などの特徴を明らかにされ、今後の巨大地震発生に関する基礎データを提供されています。

山形には10月1日に到着され、その日は学部長、副学部長、学科長をはじめとする教職員と学術交流について種々情報交換をされました。翌日の10:00～11:30には理学部地球環境学科の地球物理学関連のゼミに参加され、地球環境学科大園真子先生の大地震後の東北地方の広域的な地殻変形に関する発表と修士2年高橋承之君の会津地域の大地震前後の地殻内流体の分布や形状の変化に関する発表に関し種々ご議論いただきました。このゼミには地球環境学科の学生・院生・教員約50名が参加し、議論に加わりました。13:30～15:00には理学部全体に向けた「**Geologic Studies of Subduction Processes in the Nankai Trough, Japan Trench and Sunda Trench**」と題する招待講演会を開催しました。2011年3月11日に巨大地震を引き起こした日本海溝周辺や、巨大地震の発生が危ぶまれている南海トラフ周辺の地質構造や過去の断層の活動について詳しく説明いただきました。さらにスダ弧について、2004年から相次いだ巨大地震の発生場の構造・広域応力場について説明いただくと共に、世界的に珍しい泥火山の噴出現象とその発生要因についてご紹介いただきました。理学部の学生・院生・教職員、総勢約150名が聴講し、活発な質疑応答が行われました。英語での講義を受講した学生は、大地震に関連する内容でありとても興味を持ったと同時に、自分の英語能力をさらに高め、内容をより良く理解したいとさらなる意欲が沸いた者が多かったようです。なお、3日には地球環境学科本山功先生の案内で大地震による被災地の状況を視察し、その日の夕方には、大園先生の案内で東北大学地震噴火予知センターを訪れ、観測体制などについて種々情報交換を行いました。

ムーア教授には講義以外でも積極的に学生・院生・教職員と交流を図っていただきました。本招聘全体を通して、特に、学生・院生の国際交流に関する動機付けに大きな効果があったと思われます。今回、本国際交流事業を援助いただいた本学の国際事業化研究センターに深く感謝いたします。

今後のハワイ大学との交流事業として、11月上旬に本学科の大学院生をハワイ大学に派

遣し共同研究を進めること、また、来年4月に3年生・大学院生・教員総勢約30名がハワイ大学に訪問し講義受講や種々情報交換を行うことを予定しています。



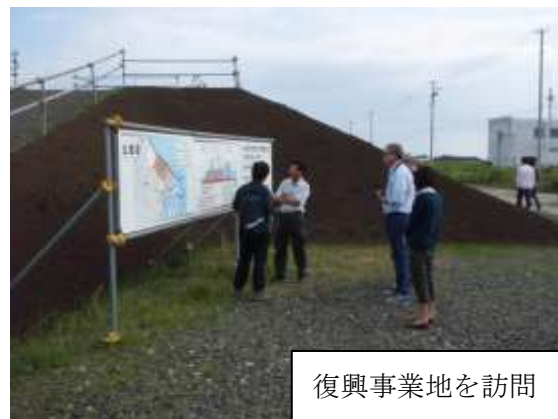
招待講演の様子



質疑応答の様子



ゼミの様子



復興事業地を訪問



玉手学部長、鵜浦副学部長、柳澤学科長との会談

左から、柳澤学科長、ジョルダン国際交流担当学部長補佐、ムーア教授、玉手学部長、鵜浦副学部長、伴